

川端康成全集 第十三卷

川端康成全集

第十三卷

末期の眼

新潮社

川端康成全集第十三卷

末期の眼



昭和四十五年三月二十五日 發行
昭和四十九年六月三十日 三刷

定價 二千三百圓

著 者 川 端 康 成

發行者 佐 藤 亮 一

印刷者 塚 田 重

印刷所 塚田印刷株式會社

原色版 半七寫眞工業株式會社

製本所 新宿・加藤製本所

東京都新宿區矢來町七一

發行所 株式會社 新潮社

電話東京(〇三)二六〇一一二一
二一六二 振替東京八〇八番

亂丁本、落丁本は本社又はお買求め
の書店にてお取替へいたします。

第十三卷

目次

伊豆溫泉記	セ
新東京名所	二九
わが犬の記	四三
末期の眼	五三
池谷信三郎	六九
直木三十五と碁	七セ
文學的自敘傳	九三
純粹の聲	一〇九
北條民雄	一二セ
十一谷義三郎	一四一
信濃の話	一四九
徳田秋聲氏の『假裝人物』	一六七

岡本かの子序説……………	一八三
秋　　山　　居……………	二〇一
眞　　珠　　船……………	二一一
片岡鐵兵の死……………	二二一
武田麟太郎と島木健作……………	二三九
哀　　　　愁……………	二五五
横光利一弔辭……………	二六五
東京裁判判決の日……………	二七一
芥川龍之介と菊池寛……………	二九三
山本有三・豊島與志雄・久米正雄……………	三〇五
綴方について……………	三二五
私　　の　　考　　へ……………	三四一

永井荷風の死	三四七
ニユウヨオクで	三五七
月下の門	三六五
鎌倉の書齋から	三八九
新春隨想三篇	四〇三

末
期
の
眼

伊
豆
溫
泉
記

1 南國の模倣

自然の形のままの岩を無造作に並べて、例へば岩の多い山川の淵のやうな湯船、

「そこはまだ脊が立つの？」と、女はこはこは縁の岩につかまつて、うつかり中へ進むことが出来ぬ。踏み外したら、ずぼりと沈むのだ。つまり、底へ小石を埋めたり、板の簀子を張つたりする、面倒を省いた湯船なのだ。

それでも中程に申しわけばかりの板を立てて、男湯と女湯とに分けてはあるが、男はその下を潜つて泳いで行き、女達の足にぶつかつて、ばかりと浮かぶと、

「きやあつ。」と大騒ぎになる。男はまた潜つて男湯に歸る。

宿屋に食事を頼むと、一人や二人面倒臭いことわる。自炊するよりしかたがないが、とにかく一部屋借りて一日二十銭か三十銭、五十銭も茶代を置かうものなら、手拭、繪葉書、石鯰、干魚など、宿にあるものを皆揃へて土産に出す。合計の値段は茶代を食み出してあるかもしれない。そして、荷物を持ちながら何町も送つて来て、なほ宿の者は恐縮してゐる。

これは、鉛温泉のことである。盛岡の花巻温泉から奥へ入つた山の湯である。

伊豆も——とりわけ奥伊豆は野趣に溢れてゐる。しかし、この鉛程に素朴な温泉はない。

また、ある地の温泉では、湯船の真中に板を渡し、藝者も客も湯につかりながら、その不思議な食卓に對ひ合つて酒を飲むといふ話を聞いたことがある。

伊豆にはこんな風變りな遊びのある温泉はない。例へば、熱海温泉は町全體に色町の匂ひがある。

伊東温泉は都會風に洗はれてはゐないが、女遊びの網は熱海よりあらはに張られてゐる。

伊東の音無森では、例年十一月十日の夜、臀摘み祭がある。氏子達はその日歌三味線もつつしむ。

社へ詣るのに提燈を禁じる。そして、無燈無言で祭式を行ふ。だから神酒を飲むにも、順々に臀を摘んで盃を送る。

「送るのは盃ばかりぢやないでせう。」とは誰しも思ふ。

人知れずあひし昔をしりつみの

祭に神もおもしろいづらん (高崎正風)

昔、謫居の源頼朝が伊東祐親の娘八重姫と、この森で忍び逢つたといふ。それゆゑ聲を忌み、音無森——なほ近くに音無川、鳴らずの瀬なぞがある。

とにかく、臀摘み祭は伊東の特産物ではなく、いろんな地方に散在する奇習である。

「萬葉時代の歌垣と同じやうに——近江の筑摩の鍋被り祭なんかも名高いが、上古の亂婚の遺風だといふ人があるね。」

「さうかもしれない。しかし、その祭が伊東にある場合は、特に町の感じを現すものになつてやしないかね。」

けれども、雪國の或る温泉のやうに、旅館が直ちに娼家であると言へるやうな温泉は、伊豆にはない。

また、下田の古老の松村春水氏は唐人お吉傳で、下田を美人國と書いてゐられる。これはお國自慢の法螺だ。伊豆の娘達も關東の田舎並みの器量しか持つてゐない。

伊豆の温泉巡りをすれば、到るところ海の乙女山の乙女が、ロマンス待ち顔に旅人を迎へるかのや

うに思ふのは、大きな間違ひだ。凡そその反對の顔ばかりと思つていい。天城の北、狩野川の流れるところ、いはゆる口伊豆では、このことが一層甚だしい。

そもそも伊豆の國は、神龜元年に遠流の地と定められて、比較的重罪人を流す、都遙かな配所だつたのだ。東海道の箱根道が開かれたのが平安朝の初め、しかしまだ足柄道の方を選ぶ習はしであつたから、その頃は人も通はぬ國だつたにちがひない。歴史に誌された一番古いのが、天武天皇の時に麻績王の長子、その後名高い流人は數へ切れぬ程だ。

その恐しい遠流の國が、いつから、そしてまたなぜ、詩の國として人々を惹きつけるやうになつたか。

「無論、伊豆が生き生きと動き出したのは、頼朝が蛭ヶ小島で旗を擧げてからだよ。彼が遠い京都から近い鎌倉へ——政治の中心を移して來てからだよ。——志賀矧川さんは、日本歴史の縮圖の土地を求めるなら、口伊豆だと言つてゐる。」

「その史蹟と傳説といふ奴が、伊豆では實にうるさ過ぎる。干物を百種類も並べた膳に坐らせられるやうだ。名所舊蹟を訪ねたくて伊豆へ來る者が、今時千人に一人あるかね。新鮮な興味のあるものは、幕末の下田開港頃の唐人との交渉と、江川太郎左衛門の活躍くらゐのものだ。その頃を子供心に覚えてゐる古老が、生きた話をしてくれるからね。」

「そんなことよりも温泉さ。」にはちがひない。

湯「出づ」から、伊豆といふ國の名が起つたと稱へる俗説もあるくらゐだ。海岸線五十五六里、面積百四方里の半島に、二十四箇所の温泉が湧き出てゐる。別な數へ方をすると、三十三の温泉だ。十二村、三ヶ町が温泉場だ。

傳説よりも温泉だ。歴史よりも地理だ。例へば、修善寺を歴史的温泉とすれば、熱海は地理的温泉

だ、と言ふ人がある。熱海の勝利は地理の勝利にちがひない。

ところが、最初に書いたやうに、その温泉は人の度^ど膽^{だん}を抜く程の變り種ではない。伊豆を詩の國とするのは、出で湯よりも風景だ。海の美しさと山の美しさを持つた半島だからだ。

「しかし、日本三景、日本新八景、その一つだつて伊豆にはないぢやないか。」

「だが、その風景を見る眼をもう少し擴げて貰ふんだな。伊豆半島全體を纏めて一つの景色くらゐにね。そしたら、新三景の一つになるかも知れないね。伊豆を國立公園にしようといふ説もあるが、いかにも公園の感じだね。伊豆には風景のあらゆる美しさの模型がある。」

そして、詩の國と感じさせる第一の原因は、伊豆が南國の模型だからだ。紀伊の感じを小さくしたのが伊豆、と誰かが言つたが、紀伊を南國の大きい模型とすれば、伊豆は南國の小さい模型だ。

伊豆には、椿の花、蜜柑類、鰹船、石楠花、海の色、鹿、植物の暖國的な繁茂、河鹿――

石楠花は高山植物だが、天城では南國的に花を開く。熱海の區裁判所の庭には、サボテンが私の頭よりも高く、熱帶的なふてぶてしい茂りやうだ。

伊豆の海山は男性的なところもあり、より多く女性的なところもある。南國の男と女と、それも人形のやうに可愛い――。

2 肌觸りと匂ひ

温泉は勿論丸裸の皮膚で、ずぼりとつかののだから、觸覺の世界だ。肌ざりの喜びだ。湯にもいゝんな肌のあることは、女と同じである。

私が知る伊豆の湯で、一番肌のいいのは長岡だつた。宿はたしか大和館だつたと覚える。これは卵の白身のやうに、つるつると粘つてゐる。女が入湯すれば、いかにも肌理が細かになり、滑らかなりさうな感じだ。長岡へよく行く人に話すと、お世辭かもしれないが彼は、

「ほんたうにさうらしいですよ。」

しかし温泉の效能書に、肌を美しくするとは書いてない。

けれども、例へば伊東の淨の池には、

「天然記念物淨之池特有魚類棲息地」

と書いた石標が建つてゐる。湯鯉、横鰻魚、迅奈良、蛇鰻なぞ、天然記念物に指定される程奇怪な魚が棲んでゐたといふ。その池の水がなまぬるく、つまり温泉の湯だから、特有の魚が育つたのだ。

例へば船原、あすこの湯の肌は皮膚病の人間のやうだ。それがまさしく皮膚病に效くといふから不思議だ。鈴木屋の内湯へ行くと、まともに見られぬ皮膚病の男、それに皮膚病のやうに水垢が多く、黄色く濁つた湯、私は早々に飛び出した。部屋へ歸ると、髪を振り亂し、頭のでつぺんを大きく剃つて水袋を縛りつけたヒステリイ女が、凄まじい形相で廊下越しに睨みつける。廊下へ出ると、日光浴をしてゐた結核の男が話しかける。

船原へは二度と行くまいと思つた。けれども、二三年前にホテルが建つて、その頃とはすっかり變つた。名ばかりでない洋館のホテルは、熱海以外ではここだけかと思ふ。

また、湯ヶ島の西平温泉は、天城の山氣らしく厳しい肌ざはりだ。

熱海の湯ざはりには、黒潮の暖流が流れてゐる。

しかし私には、湯の肌ざはりよりも先づ湯の匂ひだ。

湯ヶ島について言ふならば、天城街道で乗合自動車を捨てて、谷に下りる路に一步踏み出すと、瀬

の音に乗って湯の匂ひが漂つて来る。私は懷しさ一ぱいで駆け出す。宿のどてらに着替へると、袖に鼻をこすりつけて、綿にしみ込んだ湯の匂ひを嗅ぐ。湯船に身を沈めて、湯の匂ひを一ぱいに吸ひ込む。

「この匂ひが嫌ひかね。それぢや君は温泉が嫌ひなんだよ。——煙草好きが匂ひを楽しむやうに、いろんな温泉のちがつた匂ひを嗅ぎ分け給へ。」と、私は同行の友人に言ふ。鼻の曲る程烈しい匂ひの温泉は、伊豆にはないやうだ。

湯の匂ひばかりではない。温泉場程いろんな匂ひのあるところはない。岩の匂ひ、樹木の匂ひ、壁の匂ひ、猫の匂ひ、土の匂ひ、女の匂ひ、庖丁の匂ひ、竹林の匂ひ、神社の匂ひ、馬車の匂ひ——。温泉がもろもろの匂ひを感じさせるのだ。東京の銭湯でも、上つたばかりの時は、鼻がよく利くのと同じ理窟だ。

「あの女は今……。」と、私はよく言つて、友人に笑はれる。全く温泉宿では、女のその匂ひが感じられるのだ。温泉に長くゐると、温泉を離れてもその匂ひが鼻につくやうになるのだ。

いくら厚着の女を見ても、湯殿で會ふ時のやうに、その體の形が分るやうになると同じだらう。嗅覺のとりわけ鋭いギイ・ド・モウパッサンはお湯が好きだった。

3 男 女 混 浴

「凡そ温泉土産なるもので、一番感じの悪いものは……。」と私は言ふ。

「女の裸——つまり湯殿の女の繪を染め出した手拭ですな。ましてそれに彩色するに到つては……。」